

山間奥地の集落から人口減少社会で 土地や建物を維持管理する方法を学ぶ

Learning how to maintain and manage land and buildings from the villages in the mountain backland to a population reduction society

小椋 弘佳**
Hiroka OGURA

概要

山間奥地の集落では、人口減少社会下での担い手不足による低・未利用地や耕作放棄地の増加など土地利用管理上の課題が生じており、解決が急がれる。一方で、いまなお住民がその土地に愛着を持ち、土地や建物を維持し、衰退することなく住み続けている集落も存在する。弓ヶ浜セミナーでは、こうした地勢的地理的および文化的に類似する集落でも、集落機能の維持が困難な集落と、集落機能が維持されている集落を取りあげて、両者を比較しながら紹介した。本稿では、セミナーの内容の一部をまとめる。

1. わが国における集落部の現状と持続可能な土地利用管理体制の必要性

日本の総人口は2008年を境に減少傾向に転じた。特に集落部の人口は、1970年代すでに減少傾向にあり、今後とも変わらず推移することが予想されている¹⁾。さらに、集落機能の維持が困難となっている集落の約75%は山間地に位置する²⁾。そうした集落では、人口減少社会下での担い手不足による低・未利用地や耕作放棄地の増加など土地利用管理上の課題が生じており、解決が急がれる。集落の持続性について都市・農村計画学から考えるとき、『集落の基盤となる土地や建物を「開発」、「利用」、「維持」など状況に応じて管理すること（以下、土地利用管理）』が重要な課題のひとつとなる。

一方で、日本の集落部では、古来より自然環境に根ざし自立した暮らしが営まれ、近代化や様々な時代の施策によって集落の様相を変容させながらも今に至るまで存続している集落が多く存在することも事実である。集落の持続可能性を考える際に、そういったこれまで連続と維持されてきた集落の背景にある仕組みから、多くのヒントを得ることができる。集落を対象とした既往研究では、地域コミュニティによる地域資源の管理実態を解明した研究が多くあるが^{3) 4)}、人口・世帯減少に起因する低・未利用地化などの土地利用管理の問題に言及した研究は少ない。

そのため本稿では、一般的な集落より土地利用管理上の問題を多く抱えているであろう、地理的・地勢的に不利な山間奥地の集落のひとつとして、山岳信仰集落を取りあげる。山岳信仰集落がどういった条件下でどのような変遷を辿り今に至るまで維持されているのかについて述べる。

2. 山岳信仰集落について

山岳信仰集落とは、日本独自の伝統的な集落のひとつであり、霊山との関わりから形成された山間奥地に位置する門前町である⁵⁾。そのうち、山岳信仰集落としての構造・機能が衰退し、人・土地・むらの空洞化が生じている大山寺集落（鳥取）と、山岳信仰集落としての構造・機能が比較的維持され、人・土地・むらの空洞化が生じていない御岳山山上（東京）、戸隠中社（長野）を取りあげる（図1）。以下では、各集落における土地利用管理の実態とその理由について述べる。

	構造 (集落内で構成される階層)	機能 (宗教活動など)	人口 H22	世帯 H22	人口 H12	世帯 H12	H12-22 人口 増減率	H12-22 世帯 増減率
戸隠中社	○	○	1070	336	1259	364	-15.0%	-7.7%
羽黒手向	△	○	1579	424	1810	461	-12.8%	-8.0%
御岳山山上	一部○	△	146	36	146	38	0.0%	-5.3%
大山寺	×	×	130	45	187	65	-30.5%	-30.8%

国勢調査（小地域）データ

図1.山岳信仰集落の人口・世帯増減率(H12-22)

* 原稿受理 平成27年12月4日

** 建築学科

3. 大山寺集落における土地利用管理の実態について

鳥取県西伯郡大山町大山寺集落は、山岳信仰集落の機能と構造が衰退し、かつ土地の低・未利用化が顕著である(図2)。集落の実態を1)集落の形成過程、2)土地利用と土地所有変化、3)住民意識、4)地域組織間ネットワークの様相、5)土地・建物の管理実態の5つの視点から実証的に検討すると、集落の「土地」とそれを管理する「人」の現状は、以下の点にまとめられる。

まず、(1) 明治初期の廃仏毀釈をきっかけに山岳信仰機能の衰退から観光機能へ転換する動きの中で、社寺中心の土地所有構造から個人や法人、公共団体を含めた複雑な土地所有構造へ変容したこと、(2) 集落居住者以外の土地所有者の増加は、不在地主が増加する現在において土地利用に対する意識の差を生むこと、(3) 土地所有構造や土地利用に対する意識の変容により土地利用構造は主に宅地化を伴って変容したこと、が明らかとなった。

次に、持続的な土地利用管理を念頭に置いた際の集落が抱える課題として、多様で複雑な土地所有形態にもかかわらず土地所有者間の意識共有や、土地利用の整合をとるような仕組みが存在しないこと、その結果集落全体の景観に悪影響を及ぼす場合があること、を指摘した。



図2. 土地の低・未利用化の状況(大山寺集落)

4. 御岳山山上集落における土地利用管理の実態

東京都青梅市御岳山山上集落は、山岳信仰集落の機能が衰退しているが、集落構造が比較的維持され、人・土地・むらの空洞化が生じていない。その要因を探るために、大山寺集落と同様に5項目の分析により集落の変容過程と現状を検討すると、御岳山山上集落の特徴は以下の点にまとめられる。

まず、集落内では、極端な土地利用・土地所有の変化がほとんど生じなかったこと、集落内部で強固かつ紐帯(つながり)の強い多層的な組織間ネットワークが形成

されていた。そのため、集落外部の人が土地を所有・管理することはほとんどなく、集落内のほとんどの土地を住民が所有・管理している。

次に、集落住民が山岳信仰集落特有の社寺有地や共有地を活かして、観光地化に伴う集落内外からの開発圧力を、調整しながら山岳信仰機能と共存させるという、集落単位での住民による「共同」の土地利用管理を実現していた。

5. 戸隠中社集落における土地利用管理の実態

長野県長野市戸隠中社集落は、山岳信仰集落の機能と構造が比較的維持され、人・土地・むらの空洞化が生じていない。その理由には、住民が戸隠信仰への誇りを共有しつつ、戸隠信仰をベースとした経済基盤が確立し、若い世代に継承されていることが挙げられている⁶⁾。このような住民の思いの他にも、人・土地・むらの空洞化がみられない背景には、山岳信仰集落独自の仕組みを有していることが予測できる。集落の特徴は、以下にまとめられる。(1) 土地所有形態は、私有地の他に、共同性の高い神社有地、地域自治組織(中社組)有地、記名共有地が存在する。(2) 集落では、不適切な開発圧力の抑制や居住環境向上を目的に、集落住民で構成される複数の組織(上記(1)で挙げた組織)によって、「低・未利用地の共有化」および「共同管理」が展開されている(図3)。そして(3) その共同管理の担い手はいずれも、集落内で密なネットワークの中で、強い紐帯(つながり)をもつ組織として位置づけられる。

また、戸隠中社集落の土地利用管理手法の特徴は、以下の3点にまとめられる。(1) 強い紐帯をもつ組織が土地所有者かつ管理の担い手となることで、土地所有者間の意識共有も容易になり、集落単位で整合のとれた土地利用管理が可能となっている。(2) 集落内の主な組織である神社関係者が土地の利用管理に主体的に関わることで、地域の歴史・文化と乖離しない土地利用管理が可能となっている。(3) 共同管理の担い手が複数存在することで、資金面や管理面等の状況に応じて、整備目的に合わせた管理方法や担い手を選択できている。

このように、戸隠中社集落では、集落の環境向上や不適切な開発の防止を目的に、集落住民を中心とする複数の既存組織(神社や地域自治組織)によって、社寺有地や自治組織所有の共有地を活かした、「共同管理」が展開されていたことがわかる。こうした体制が、集落の山岳信仰機能と観光機能を共存させ、集落を前近代から現在に至るまで人・土地・むらの空洞化を生じることなく維持してきた背景にあると考えられる(図4)。これは、御

岳山山上集落でもいえる。さらに、戸隠中社集落では、既存の共有地を共同管理することにとどまらず、低・未利用地が発生した際に、新たにその土地を共有化し、共同管理の範囲を広げていることは、特筆に値する。

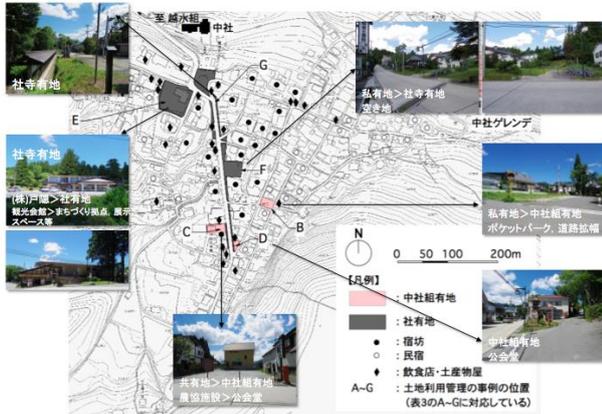


図3.低・未利用地の共同管理の例（戸隠中社集落）

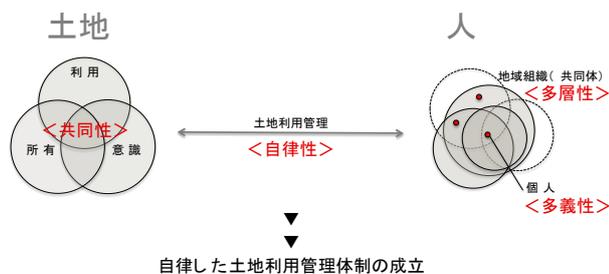


図4.管理対象の「土地」と管理主体の「人」の特徴
(御岳山山上・戸隠中社集落)

6. まとめ

日本の集落部では、持続可能な集落の構築に向けて、適正な土地利用管理手法の検討が急がれる。本稿では一般的な集落より土地利用管理上の問題を多く抱えているであろう、地理的・地勢的に不利な山間奥地に位置し、前近代から存続する山間奥地の集落のひとつとして、山岳信仰集落を取りあげた。そのうち、集落機能の維持が困難な集落（大山寺）と、集落機能が比較的維持されている集落（御岳山山上、戸隠中社）の実態をみた。そこから、集落機能が維持されている集落では、人口減少社会下で担い手が限られる中で、住民による「共同管理」をキーワードとした土地利用管理体制が存在していた。この「共同管理」は、人・土地・むらの空洞化を止めるためのひとつのきっかけになり得ると結論づけた。

参考文献

1) 農林水産省：平成26年度食料・農業・農村白書,

p4, 2015.5.26

- 2) 総務省 地域力創造グループ 過疎対策室：過疎地域等における集落の状況に関する現状把握調査報告書, 2011.3
- 3) 岡村勝司, 村落共同体「野沢組」の道路整備に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第472号, pp.133-139, 1995.6
- 4) 山崎義人・後藤春彦：長野市の山間部の集落における共同の維持管理の差異とその要因に関する研究, 日本建築学会計画系論文集 (572), pp.83-90, 2003.10
- 5) 長野 覺：英彦山修験道の歴史地理学的研究, 名著出版, 1987
- 6) 高距御師集落としての中社・宝光社, 戸隠信仰の諸相, 戸隠神社, pp.317, 2015

